

東海大(院) ○ 井野上 眞弓

目的 今日、医療技術の進歩により我々を取り巻く「死」の状況は大きく変化し、臓器移植・脳死・安楽死などの深刻な問題となっている。この「死」を巡る問題は、家族・家庭生活を研究対象とする家政学において無視することのできない重要な研究課題のひとつである。本報告では、従来の家政学研究において取り上げられてこなかった「死」の問題を取り上げ、ライフサイクルの中に「死」をどう位置づけていくのかを考察することを目的とする。さらに、家庭生活における死の受容、特に女性の死の受容の問題から、女性差別との関係、すなわち女性差別の概念の形成と定着のプロセスを明らかにすることを目的とする。

方法 今日の日本人の死生観の形成された平安時代を取り上げ、平安期の家庭生活の中で、女性がどのように「死」を受容してきたのかを「伊勢物語」「更級日記」「日本霊異記」「今昔物語」「日本三代実録」「小右記」「続本朝往生伝」「成尋阿闍梨母集」等から分析する。さらに、死の受容を通してなされる女性特有の行動、及び女性への教化内容を検討し、女性差別との関連を考察する。

結果 平安期の女性は①夫に看取られることなく子供や兄弟によって看取られ、②自らの死を積極的に肯定し、③家を離れて寺院施設で死を受容した。④背景には浄土思想があったが、⑤この浄土思想の民衆化の過程こそが、女性差別の概念の形成と定着のプロセスであったと考えられる。なお、⑥この差別の概念が、今日の女性を取り巻く状況に大きな影響を及ぼしているとも考えられる。